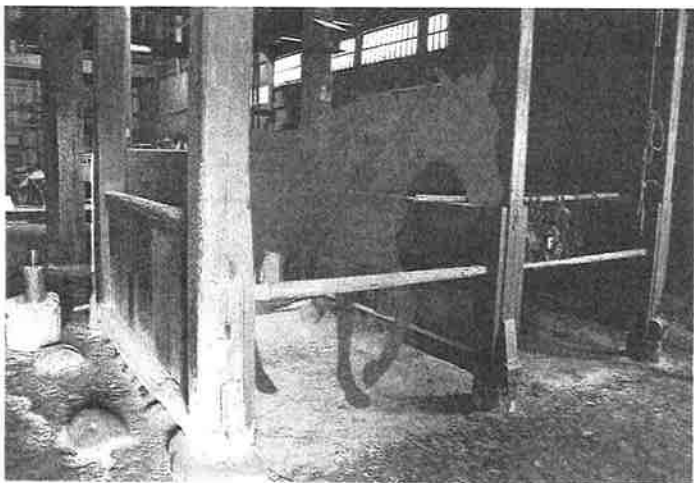


文化



旧奈良家住宅(重要文化財、秋田市金足)の馬屋。馬が出ないよう入り口に渡した横木が馬柵棒(ませぼう)。馬のシルエットはイメージ

奈良時代末に成立した「万葉集」収載の3096番の歌「馬柵越しに 麦食む駒の 罵らゆれど なほし恋しく 思ひかねつも」を、万葉学者の伊藤博は「馬柵越しに麦を食む駒がどなり散らされるように、どんなに罵られても、やはり恋しくて、思わずにやうとして思わずにはいられない」と訳している。駒とは子馬、馬のこと。

この馬柵について、伊藤は自著「萬葉集釋注」のなかで、「『馬柵(うませ)』は筆者の幼年時代、『馬柵棒(ませぼう)』の『馬柵棒(ませんぼう)』の名で、信州高遠地方に残っていた」と記している。

人と地を潤すことば

秋田の方言と万葉集 三浦 衛



みづら・まもる 1957年井川町生まれ。出版社「春風社」社長。著書に「父のふるさと 秋田往来」、詩集「カメレオン」「鱚hadahada」など。横浜市住。

うことか。

つぎに3406番の歌「上つ毛野 佐野の荦立 折りはやし 我れは待たむる 来とし来ずとも」。

伊藤の訳は「上野の佐野の青菜の荦、その荦立を折り取っていつそ茂っておくれと折っては、あの方がしげしげとおいでになるのを待ちましよう。今はちつとも通つて来なくても」である。

伊藤は「折りはやし」が難解だとして、「一般的には『折り取つて栄えあらしめるようにする、すなわち、調理して食べられるようにする』と解するけれども、食べられるようにするといふのであれば、『摘み取りて』または『折り取りて』とでもいふべきではないか」と疑問を呈している。

つまり、「折りはやし」の「はやす」を「栄やす」呪的行爲とみて、今はちつとも通つて来てくれない男を呼び寄せるための、いわばおまじないの意味合いで「折りはやし」と言っているのではないかと、と解釈している。

学者の解釈に異を唱えるつもりはないけれど、先の説明には、「はやす」を「切る」の意とみる視点はないうた。さてこの「はやす」、秋田の人は、「まな板の上で物を

ネジ 秋田市 堀井 喜代子

私を今までふさいでいたネジが
ころころ転がりとれてしまった
ほおつておけば
何処かの隙間や 排水口に落ちて
あとかたもなく忘れられるであろう
プラスでもない
マイナスでもないネジは
もともとどこに居ようとしても
まったく入つていかなかった
こめかみにある ネジは
フランケンシュタインのごとく
現在と過去の体を
深く結びつけていた
古くはない
新しくもない
私しかない 私専用のネジ
めったにないが
今日は パーンと
てつぼう玉のように とんでつた
怒り 感動 喜び 悲しみが
大きくなると それは
自分というものを抑えるため

まつ赤になった顔から
ぱーんと 勢いよくとんでゆく
最高記録は 200mか
運悪く側に誰かがいると
ネジはその人を つきぬけ
きれいに貫通してゆくであろう
でも 相手には
痛さも かゆさも無さそうだが
ネジ穴は いつの間にか
他にかえられ 埋められる
フランケン2号 3号...と
はてしなく つづく
それは 合わせ鏡のように
ずっと私を
はてしなく つないでいるよ

【評】時には飛んで行つてしまふネジ。だが新しい専用ネジが埋め込まれ、また自分を繋いでくれる。作風はコミカルだが、本質をよく捉えている作品だ。

前田 勉・選

さがけ詩壇

切る」意で、今も使っている品物と添え状が違っていたことは、例えば「このほうちょうだば、切れ味わるくて、はやさいね」など。だから「佐野の荦立 折りはやし」も「佐野の青菜の荦、その荦立を折り取り、切つて料理して」でふつうに意味が通るような気がする。あるいは、物を切る行為が呪的な意味を併せもつていたのだろうか、との想像も浮かんで来る。

三番目は、「さき行てう」「あきたまで」などの会話に用いられる、方向を示す「さ」。万葉集の4132番に「縦さにも かにも横さにも 奴とぞ 我れはありける 主の殿外に」がある。

万葉集の編者の一人・大伴家持の同族ともいわれる大伴池主の作で、家持との贈答歌として作られたものである。家持から池主あてに送られた

この歌の冒頭「縦さにもかにも横さにも」を私が秋田弁風に勝手に訳すと、「縦の方がいっても、横の方がいらいつても」とでもなるのか。無手勝流ではあるけれど、私が秋田の高校に入ったときに、国語の先生の紹介で購入した、佐伯梅友、馬淵和夫編による講談社発行の「古語辞典」によれば、接尾辞の四番目に

「方向を表わす」ことばとして、例文に万葉集のこの箇所が引かれている。つたない私訳は、当たらずとも遠からずか、とも思ふ。

ちなみにこの歌に出てくる「奴」であるが、私としては、アクセントを三音目の「こ」でなく、秋田風に「や」に置きたい。そうすると、戯歌としてのこの歌の精神がさらによく表われるように、楽しくなる。

秋田県はいま「高質な田舎」を標榜する。その精神は、出身者として我が意を得たり、の感が強い。秋田犬や男鹿のナマハゲのポスターを関東近県で見ると懐かしさ、秋田の良さを再確認する。

ことばは物とちがいに目に見えないけれど、万葉時代の息吹がいまも消えずに生き、土地と人びとを潤していることとも、「高質な田舎」の証しとしてもっと意識したい。